

講義 レジュメ (I) 06.4.18 岸井成格
(毎日新聞社特別編集委員)

一、情報とは何か

「桐一葉 落つて 天下の秋を知る」 (情報のハスターン)

「依りし心へし、矢のしるへはすか」 (権力と情報)

① 事実と真実

② インフォメーションとインテリゲンス

③ 活字, 映像, 音声

④ 余韻 a. 「藝」と「桐」と「藝」

b. 新聞印字機と(和)

⑤ 社標軸 a. 歴史と世界

b. 思想と心情 (宗教)

二、スケーフ(持分系)

① 時間差型

② 出会う頭(飛込型)

③ 組、撃つ型

④ 企画型

⑤ 個人フラーとチームフラー

三、「日本」とは (情報の基礎知識)

① 網野善彦の向い

② 「紀元」と遺跡発掘

③ 「日の丸」「君が代」

四、最近のニュースカウ(マススタディ)

① 偽メール

② 横田めぐみさんの夫

③ 皇宮典範の改正

④ その他

記者の目



ロッキード事件は、私にとって、決して過去の事件ではない。今なおナマナマしく生き続けている。これは、30年前に米国からの第一報を受けて取材・報道にあたった記者たちの共有する実感だろうと思う。

「あの日」のことは忘れられない。2月5日未明、「ロッキード社が巨額の工作資金で『わいろ商法』、政界の黒幕、児玉善士夫氏に21億円——」

深夜の編集局は騒然となった。直ちに政治、社会、経済、外信など関係各部は特別取材チームを編成すること、「司令塔」になる編集局責任者を決め、そこに情報を集中する態勢をとった。

この初動の対応の速さが、後々「ロッキードの毎日」という高い評価を得る原動力になった。そして半年後の7月27日、田中角栄前首相(当時)の逮捕となり、号外の束を抱えて国会や議員会館を配って歩いた。

「日本を震撼させた20

ロッキード事件30年

岸井成格(編集局)

0日(毎日新聞社刊)は、私にとっても長く苦しい取材と執筆の連続だった。

しかし、ロ事件は政治取材のイロハだけでなく、「政治」を取り巻くあらゆる要素が凝縮して詰まっていた。その後の30年間、大きな事件や動きがあるたびに、「あの時はどうだったか」と考える習慣があった。

特に「権力とは何か」を問いつける立場では、権力闘争、国会対策、派閥、族議員、「黒幕」と「政商」、捜査と政局、内閣総辞職と解散・総選挙、国会の証人喚問と参考人招致、メディアの立場——最近起きていく多くの事例を解くカギがロ事件にすべてそろっている。

例えば小泉純一郎首相の発想と政治手法は、ロ事件のすさまじい権力闘争抜きには生まれなかった。

私の推測では、首相は三つの確信を持っている。①国民の支持がある限り、政権は簡単には倒れない②首相の専権である衆院の解散権と人事権(閣僚の任免権)は、誰の指図も受けてはならない③「自民党を本気でぶっ壊す覚悟」がなければ権力闘争には勝てない——「小泉政治」の権力の側面だ。

いずれも当時の三木武夫

米の世界わいろ商法疑惑

首相の「強さ」と「弱さ」から得た教訓だった。ロ事件捜査は、同時におん念渦巻く権力闘争史でもあった。

圧倒的な「三木降ろし」(退陣要求)の中でも、所属する福田(起夫)派内で、ただ一人、異をとらえたところが「変人」。「一匹オオカミ」の異名のルーツにもなった。

そんなところにも、ロ事件と二重写しになる首相の行動原理が透けて見える。

ところで三木さんがらみでは、私には永遠の宿題が残されたままだ。

ロ事件は、ロッキード社

「丸紅・全日空のエアバス「トライスター」売り込みルートが解明された。

しかし、疑惑の核心だった児玉ルートの21億円も、軍用機であるPX1(次期対潜哨戒機)導入問題も解明されなかった。

三木首相は、結局解散権を封じられたまま、任期満了選挙の敗北で退陣した。

退陣して間もなく、私は東京・番町の三木事務所へ呼ばれた。それまで接点は少なく、三木降ろしでは反三木陣営を取材していた。

開口一番、三木さんは「アタタは議会制民主主義につ

「ところでアナタにとって、ロ事件取材で最も心残りは何ですか」

「それは児玉ルートとPX1が手つかずのまま、疑惑が残ったことです」

「そこです。これは大変なことです。国の安全保障の根幹を揺るがしかねない問題です」

「今ごろ言われても困ります。なぜ首相として解明するよう指示されなかったのですか」

「結論から言えば、行政や捜査には限界があったという事です。ここから先は国会とマスコミの仕事で

たどりの着けず悔しい

いてどう考え

「てますか?」と質問してき

た。これには当

惑した。しば

らく口頭試問

か禅問答のよ

うなやりとり

が続いた。その後、当時の取材メモによれば、概要次のような会話になった。当時は「オフレコ」の話

「毎日」取材班は、こうした大きな構図を描いていた。そこへたどりの着けなかつた悔しさが残る。



米上院多国籍企業小委で証言するコーチヤン氏(左) 11976年2月6日撮影

新聞にタブーは存在しない！

毎日新聞編集委員 岸井成格



●きしい・しげただ
1944年東京都生まれ。
67年慶応大学法学部卒業、毎日新聞人仕。
ワシントン特派員、サンデー毎日編集部、
政治部長、論説委員長などを経て現職。

写真：立本義浩

「財界・米國の勢力」

また政治家駆け出しの頃だ。長期政権を誇っていた佐藤栄作首相(当時)の側近の一人から「政権(権力)維持にも『三種の神器』があることを知っているか」と聞かれた。知るはずも

なかった。

側近氏によれば、「一に『財界』、二に『米國』だった。こまでは漠然とながらも理解できないではなかった。

問題は三だった。「それは右翼、暴力団、その他もろもろ、いわゆる『國の勢力』だ。ここを押さえていなければ、権は持たない。これを知らなければ、

一人前の政治家とはいわれない」

幸か不幸か、余り「國の勢力」と政治とのかかりについて知る取材機会はなかったが、「総理大臣の犯罪」として摘発されたロッキード事件で、はしなくも「三種の神器」が次々に顔をのぞかせた。

黒幕・児玉蒼士夫、政商・小佐野賢治、GHQ(占領軍)人脈、まさに「その他もろもろ」には謎の「M資金」人脈、旧満州人脈や「児玉機関」をはじめとする特務機関人脈など、ロ事件周辺には得体的に知れない話がゴロゴロころがっていた。

「なるほど第三の神器とは、こういうことか」と納得する半面、その事態を十分に取材し、記事化できたかどうかは大いに疑問が残る。

は新聞にタブーが存在するとはしていない。先輩達から「タブーだ

から書くな」といわれた経験もない。

しかし、外から見たらどうだろうかと、とは考える。結果的に、タブーが存在するかのようには「腰が引けている」「意識的に避けている」と見られても仕方のないような分野やケースがあることも事実だ。

新聞のタブー

まず機密のベールが厚く、取材の壁がとてつもなく高いものがある。つまり証言や証拠によって裏づけることが容易でない分野やケースだ。しばしば「記者にも捜査権、査察権があったらなあ」と嘆息することがある。

端的にいえば核兵器など安全保障や外交の舞台裏であり、疑獄事件だ。もう一つは人権やプライバシーに深くかかわる問題だ。記者個人の性格

や資格にもよるが、どうしても腰が引けがちになるケースが多い。

ケース・バイ・ケースにしても自殺や精神疾患のからむ事件や事故は、取材はできても記事化は避けることになる。

前者がらみでは痛恨事がある。口事件解明に政治生命を賭けた三木武夫首相当時は、総選挙での自民党敗北の責任をとって辞任に追い込まれた。辞任直後、私は三木事務所と呼ばれて、しばらく議会制民主主義とは何ぞやというような禅問答につき合わされた。そのうち三木さんが「口事件をどう思いますか」と、私の目を見据えて聞いてきた。

「率直に言って『兎玉ルート』がほとんど未解明に終わったことが残念でなりません」と答えた。

そこからやりとりは、とんでもない方向に進んだ。疑惑の本命は全日空のトライスターではなく、軍用機の対潜哨機機P3Cではないか、となった。三木さんはいった。

「これは大変なことです。安全保障を人質にした国家間犯罪ではないですか」

完全オフレコの約束を守りながら、再び取材に全力をあげたものの、その壁は厚かった。

私は当時の安原美穂法務省刑事局



長の上に乗りに込んだ。いわゆる「ハコ乗り」取材の目的は、日本首脳会議と捜査の関係だった。かねてから口事件取材班の間では、ニクソン、佐藤のサンクラメント会議と、ニクソン、田中のハワイ会議に疑惑解明のカギがあるといらんでいた。

しかし、何の証言も証換も得ることができないでいた。

安原局長の答えは、ハッキリしていた。

「首脳会議の身を捜査対象にはできません。端緒がどうであれ、事件が立件できれば問題はない」

そして安原さんは、最後に三木さんと同じ言葉を口にした。

「ここから先は、まさにマス・メディアの仕事ではないですか」

使命感の強弱

痛恨事というのは、こうしたいきさつを苦しい思いとともに今なお引きずっているからにはほかならない。これも結果的には、タブーが存在する傍証になるだろうか、そこは判然としない。

また慎重さが要請され、取材紙面化両面で神経を使う分野はある。それが外から「タブー」と見られている分野だろう。大きくわければ、皇室、被差別部落の「同和問題」、在日韓国・朝鮮

人、そして宗教団体だろうか。

それぞれ別の複雑な理由によるが、慎重にならざるを得ないという自明のことだろう。さりとて私たちは、これらの分野やテーマがタブーだとは考えていない。ニュース価値ありとなれば、当然のことながら果敢に取材し、記事化することにはためらいはない。

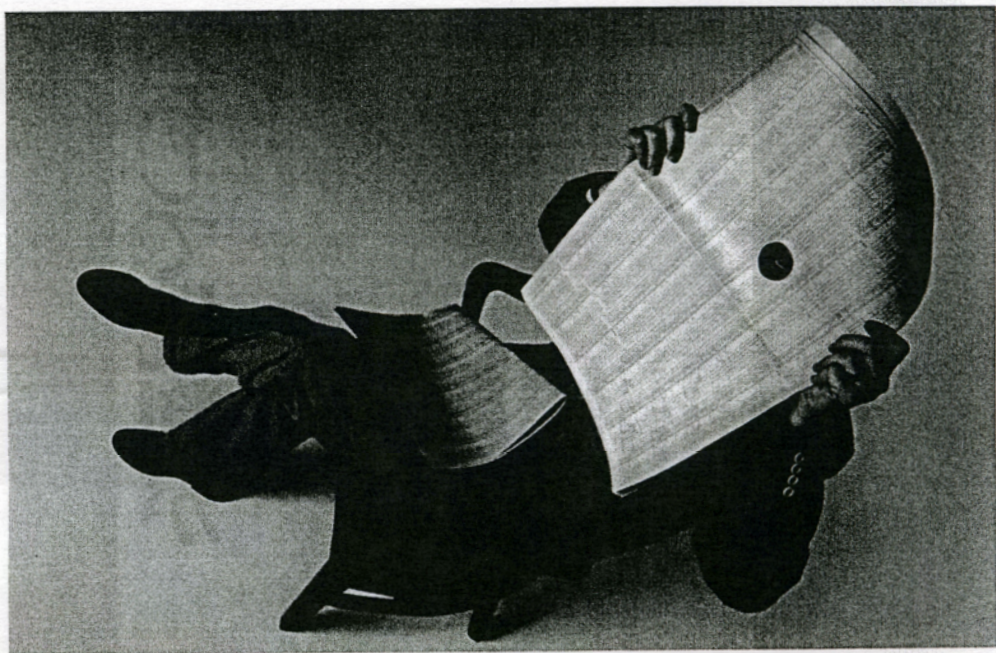
かつては否、今でも一部では中国関係もタブーではないかと指摘されることが多い。取材の壁が厚いこと、中国政府、国民の対日感情に配慮して慎重を期すということではあった。心情的に慎重に過ぎて、結果的に新聞側の自己規制が働きタブー視に近い状況がなかったとはいえない。このことは前記の各分野にも起きない、とは断言できない。

それはタブーが存在するのではなく、記者個人や新聞社その時々姿勢に深くかわる問題であり、ジャーナリズム本来の精神、使命感の強弱によつて決まる悩ましい問題でもある。

野中氏の政治力の背景

冒頭の三種の神器に戻つてみたい。

自民党の野中広務前幹事長は、今や押しも押されもしない政界の実力者である。世紀末の「加藤の乱」をあつさ



りと鎮圧し、森喜朗内閣の生殺与奪の剣(権)を握っていた。

かつて情報通として政財官にニラミを効かせた後藤田正晴元官房長官は「野中という男は凄いい情報能力を持っている。どこから情報が集まるのか」と野中さんの情報能力に舌を巻いたことがあった。

政界の情報通によれば「それは京都にある」と断言する。まず共産党支配の強かった府政と闘い続けた「反共の闘士」が土台にある。

同時に①被差別部落②在日韓国・朝鮮人③右翼・暴力団④宗教団体——に太いパイプを持っており、実に細々した情報までが野中さんのアンテナに引っかかる仕組みになっているという。

これらが底流では複雑にからみ合っていて、野中さんの「政治力」の背景になっていることは確かだろう。それを直ちに「間の勢力」と表現するのは間違いだらうが、長期政権の要諦ともされた三種の神器のうち「右翼・暴力団その他もろもろ」の情報までを駆使できる政治家はそうはいない。

野中さんの実力を分析する上では、少なくとも欠くことのできない背景であり、決してタブーでもないはずだ。

リアクション・ペーパーについてのコメント

岸井成格

『ジャーナリズムの現在』のシリーズ講座を企画、実行された貴大学のご努力に敬意を表すると共に、学生さん達が熱心に受講されたことに心より感謝申し上げます。

「スクープと権力」のテーマでは、もっと論理的かつ掘り下げた講義にすべきだったかもしれませんが、分かり易いガイダンスということで、私の体験を中心に「情報とは何か」「スクープの多様な側面」について話をさせていただきました。

学生さん達のリアクション・ペーパーを読ませていただきましたが、かなり理解されたようでホッとしています。

ただ、「沖縄“密約”事件」「ロッキード事件」は、講義の核心部分でありましたが、新聞学科と他の学部生の間には、基礎知識に差があり、十分に理解されたかどうか不安が残り、反省材料になりました。事前に事件の概要などのプリントを配布しておく必要があったかもしれません。

1 情報とは何か

① 「桐一葉落ちて天下の秋を知る」を例に、叙事詩、叙情詩では全く意味が違ってくる上に、豊臣方の重鎮、片桐且元が豊臣家の家紋を題材に「豊臣家の滅亡」を予言したという“伝説”が“事実”であれば、歴史ドラマの重要な一コマになる。五・七・五の俳句一つでも、読み方によって情報の量も質も違ってくる典型例として記憶してほしい。

そこに講義で示したように、なぜ日本政府の紋章が桐なのか、歴代首相の勲章が「菊花」と「桐花」なのかなどの情報が加味されると、さらに知識は豊かになる。

インフォメーションとインテリジェンスは、日本語では同じ「情報」と訳されることが多いが、時に似て非なるものとなる。

② 「情報は先入観や偏見を持たず、素直に受け取る。その上で全て疑ってかかれ」

これは取材・報道するメディアにとっても、それを受け取る読者・視聴者にとっても情報に接する時の鉄則になる。

③ 「情報はその瞬間、その場所、その人の切り取られた事実であっても、それは必ずしも真実とは言えない」(特に映像、音声メディアは、リアリティ、インパクトが強いだけに注意が必要だ)

三年前のイラク戦争でのフセイン大統領の銅像が民衆に引き倒される映像や、政治家や官僚が「情報操作」を意図した発言などは、必ずしもウソをついているわけではない。「事実」の断片を見せたり語ったりしている。

2 スクープ（特ダネ）とは何か。

① 「スクープには様々なパターン（型）がある」

基本的には地道な努力や粘りがなければつかめないが、極めて偶然性の高い「出会い頭」型のものも多い。しかし、狙いを定めて発掘する“真実”や、隠された事実を暴き出すことがスクープ本来の目的だろう。

② 「権力はいざとなれば、何でもしてくる」

いわゆる権力のカベは厚い。このカベを突き破るには様々な創意と工夫、用意周到な準備が必要であり、権力側の仕掛けてくるワナや、報復に対する覚悟が必要になる。

③ 「スクープはしばしば悲劇を伴う」

学生さん達はスクープに対して、一見して華やかでハッピーなイメージを持っていたよう（取材に大変な苦勞を伴うことは漠然と知ってはいたようだが）だった。しかし、スクープの中身、質によって多少の違いはあるものの、多くの場合は、そのニュースの当事者、関係者の人生を一変させたり、会社が倒産に追い込まれるケースがある。

またニュース・ソース（情報源）を守る、いわゆる秘匿が困難になるなど厳しい状況に記者が追い込まれたり、「沖縄“密約”事件」のように記者生命を絶たれ、三十数年経ても名誉が回復されないケースも生じる。「特ダネ記者」たちの講義を楽しんでください。